

ペキン・ロードを越えて鴨緑江へ

ジャック・ロンドン記

森 孝晴・戸川聖也訳

ピョンヤン，1904年 3月7日—ペキン・ロードにて。

このペキン・ロードは泥の川だと称され続けてきた。ただしその名は完全に正解というわけではなく、というのもそれは昼間だけの話だからだ。夜になると一転、氷の川へと姿を変え、どの峠でも道の北側は一日中氷に覆われたままになっている。

そしてその薄く氷が張り、15度から30度ほど傾いている傾斜の上で一人の男は馬を連れ、初めに馬が足を折らないよう祈り、そして次に馬が自分の方に落ちてこないように祈る。その男は、自分自身の後ろから、または覆い被さるようして、彼の方に今にも落ちてきて自分を押しつぶしてしまいそうな馬を気にかけなければならないだけでなく、自分の足元も気にしなければならなかった。というのは、そこが滑らかな氷の地帯で、ダイヤモンドにも負けず劣らず硬いもので、そしてその急斜面は磨かれた床よりも何倍も滑りやすくなっているということを念頭に置いておかないといけなかったからだ。

滑る男と滑る馬はめでたい組み合わせではないが、一方、長い列をなしている多くの滑る馬と男たちが一隊となると、人と獣も同じように汗をかき始める。我々が歩兵隊の列の後ろで登ったこのような氷の斜面を、私はすぐには忘れはしないだろう。男たちは右に左にのたうつように歩いていた。1人が滑れば他の連中も滑る。私の前にいたマクロードは奇妙にくるっと回ったかと思うと、その瞬間に転んでしまった。1人の兵士が彼をすくい上げたが、すぐに彼自身も同じように転んだ。私の足も同時に多方向に動こうとした結果、危険だが、奇跡的に保たれた不安定な平衡状態となっていた。しかし、哀れな私の馬、ベルの4本の足はというと同時に様々な方向へと滑ってしまった。さらにベルの背後で、ジョーンズと彼の馬がベルの下へと滑り、もがいていた。ジョーンズはベルが彼の方に倒れ落ちようとするたびに叫んだ。ベルは何度も倒れそうになっていたため、ジョーンズは叫び続けた。

「危ない！お前の馬の足は折れかけてるぞ！」それがジョーンズが繰り返したことだった。それからそれは「馬の蹄鉄を見ろ！」に変わった。

私は蹄鉄を見てみた。ベルはひづめで地面を蹴り、やみくもによじ登ろうとしていた。足で氷に衝撃を与えるたびに蹄鉄自体が足から動き、そして氷の上から滑り落ちるのが見えた。私たちが止まることができないまま頂上に着く頃には馬の蹄鉄が全て緩んだ状態になっていた。そのうち二つは手で外すことができるほどの状態にさえなっていて、一方、マクロードの馬の後ろ足の蹄鉄は完全に無くなっていた。

ジョーンズは荷物と共に先を急ぎ、マクロードと私は我々の馬を率いた。五里〔約20キロ〕ほど進むと、兵隊で溢れている村にたどり着いた。運が良いことに私たちの通訳が前方と後方にいたが、

キーワード：Jack London, War Correspondence, The Rosso-Japanese War

私たちは信任状、さらに日本語で大使のハヤシに書いてもらった手紙を見せた。私たちは将校たちから丁寧な扱いを受けた。頭を刈り上げているある若い中尉が馬に跨りながら、鞍袋の留め金を外し、蹄鉄を引っ張り出した。

「俺が言えることは、戦争について何かを学んだということだけだな」マクロードはそう言った。

それは私も同意見だ。ジョージ・バーナード・ショーの「臆病な兵士」^{chocolate cream soldier}はヨーロッパの兵士には当てはまるのだろう。しかし、日本兵はそうではない。日本の将校達は菓子や鞍袋やホルスターに入れて運んだりしない。しかし、そこに蹄鉄工はいなかった。そして私たちが寒さの中足を踏み鳴らして、3時間ほど次の騎兵隊の派遣を待っている間、これからは私たちが蹄鉄を鞍袋に入れて運び、そして、私たち自身が蹄鉄工になるということを決意した。

日が暮れた後、私たちは出発した。馬達のひづめが凍った路盤の上に鳴り響く。そして十里ほど歩いてジョーンズに追いついた。ジョーンズは6棟ほどの家しかない村に兵舎を見つけていた。ここでは百人ほどの兵隊達が割り当てられていたが、実に勇敢にも彼は私たちの部屋を確保してくれた。その部屋には私たち三人のための簡易ベッドを並べるスペースがあったが、十人ほどの兵隊達が床に収容されることになっていた。ジョーンズは将校に何度も場所を空けろと命じられていて、何度も私たちの荷物が通りに投げ出された。朝鮮の肉体労働者と通訳者達が立ち退かされた後、小人^{こびと}を死ぬほど恐れているのでジョーンズに次の村へ行くよう懇願した。しかし、ジョーンズは次の村も同じように兵士たちで溢れていると考えた。そして私たちの荷物が投げ出されるたびに、震えている肉体労働者達に荷物を取ってくるよう命じた。

ここで倫理的な問題が浮かび上がってくる。あの夜、宿を共にした私たちとジョーンズがその家を占領することは正しかったのだろうか？あの家は所有権により私達のものだと判決が出るかもしれないし、国の占有権により兵士達のものになるかもしれない。一方で、その家を所有していた朝鮮人達はどうか？とにかく、マクロードと私はジョーンズに感謝し、よく眠ることができた。

私達の馬に蹄鉄を履かせておくことは大きな問題だった。そもそも私達の蹄鉄は白人の蹄鉄で、朝鮮の蹄鉄工達はそれについて何の知識も持ち合わせていなかった。彼ら自身の蹄鉄に関する知識は何世紀にもわたって積み上げられてきた知恵だったため、朝鮮人達が白人の蹄鉄についてさらに数世紀をかけて何かを学ぶという夢物語は彼らの創造力を越えていた。私たちにはそれまでの間待っている余裕はなかった。

次に、日本軍の蹄鉄工達は私達の馬に蹄鉄を打つことに関して運がないようだった。毎日私達のために蹄鉄を打ってくれるが、毎日その蹄鉄は外れるのだった。それを見て私達はアメリカの鍛冶屋が恋しくなり、私達の馬をなんと、実に180マイル〔約290km〕離れているピョンヤンに連れて行く羽目になった。

私はここで蹄鉄用の釘をアメリカ人の宣教師、グラハム・リー氏から数ポンド買った。私は同じ宣教師を通してどうにか、朝鮮人の鍛冶屋を確保した。彼はベルの型で2セットの蹄鉄を作ってくれることを引き受けてくれ、この大量の注文を引き受けるとすぐに酔っぱらってしまった。しかし、リー氏はその鍛冶屋と取っ組み合いを始め、最後に私は蹄鉄を受け取ることができた。さらに工兵隊長と騎兵隊長が私に既製の蹄鉄をあてがってくれた。これから先は、鞍袋に蹄鉄を揃え、さらに釘を打つためのハンマー、釘抜き、鉄のくさびを揃え旅に出る。そしてもし、ベルがこの試練を耐え抜いたら、私はきっと蹄鉄工の仕事について何か学ぶことができるだろう。

しかし、馬の足だけがベキン・ロードを耐えてきたわけではない。足を痛めている兵士たちがかなり目立って増えてきていた。彼らはあらゆる連なっている一隊や大隊の後方を何マイルもとぼとぼ歩いていた。そして、行軍中の兵士達の足の痛みを勝る不幸など無い。一歩歩く度に苦痛が走るが、一日中、彼らは一歩ずつ進まないといけな。痛みが引くまで横になって休むことができさえすればなんてことはないだろう。しかし、新たに肉を引き裂かれながら彼らは一歩ずつ進まなければならぬ。

要約すると、彼らにとっての楽園とは動きを止めることだと言えるだろう。そして長い間進軍しながら疑いようもなく仏教の涅槃を夢見ていた。ともかく、彼らは歩きながら夢を見た。目を覚まさせるものはなかったから。跳躍する私達の馬のひづめの音は彼らに何の影響も与えなかった。私達が「足を負傷した兵士」の一団の間をジグザグとすり抜けても彼らは散らばりもしなかった。私達の馬が突っ切って通り過ぎようとして、彼らにぶつかっても、道を開ける最小限の努力さえしなかった。船酔いした人のように意識がなくなっているので気遣いなどできなかった。さっと横によけるために一瞬だけ労力を注ぐより、跳ね飛ばされる方が楽だ。別に私たちがそうさせているわけではないが、彼らにとっては気遣ってもらってもありがたいみはない。

兵士たちよりも早く移動していたので、私たちは、部隊から遅れないように必死に進む「足を負傷した兵士」を追い抜いていった。彼らの大半は自分のナップザックをそのために徴用された日雇い労働者たちの背中へ投げ捨てた。多数の兵士たちが硬い革製の軍靴を捨てて、従来の装備であったわらのサンダルに履き替えた。そして私は、一枚の硬い布を足の裏に敷き、裸足のままで凍っている泥の道をのろのろ歩いている兵士がいるのも見た。しかし、それはその布を足に馴染ませる過程なのであった。こうしていれば、500マイル〔約800キロ〕ほど進んでも「足を負傷した兵士」はほとんど現れることはないだろう。

黄州の例として、道中では他にもそういう過程は存在した。そこでは朝鮮人の住民達が、白人に宿と馬の餌を与えるという便宜と白人から盗みを働くという不適當な行為を訓練されていた。黄州は古代からの城壁都市で約3万人もの朝鮮人が住んでおり、美しい景観と共にナムチョン川の右側に位置していた。あの日マクロードとジョーンズは140里〔約192キロ〕進んだ。午後遅くに巨大なトンサン峠を渡り、暗闇の中、現地の山賊を恐れて村がない道のりを20里〔約13キロ〕旅をして、馬と男たちは疲労困憊の状態で黄州に到着した。私はいつも通り後ろから押し進んでいたが蹄鉄が緩んでいたのが遅れてしまった。

黄州には3万人もの人が家を持って暮らしていたが、ジョーンズとマクロードには1部屋すら貸さず、馬のために1オンス〔約28グラム〕の豆と大麦も売ってはくれなかった。すっかり疲れている男たちと馬は街の中を行ったり来たりする羽目になった。頻繁に現れる次の村までの道のりを示す案内、「あと10里〔約40キロ〕」を尻目に見つつ、絶え間のないおしゃべりは繰り返されたが食い物は何もなかった。

「あと10里」というフレーズは妙にジョーンズを苛立たせる効果があった。彼はこの国に来てからこの表現以外は何も聞いていない、そしてここ朝鮮で「あと10里」というタイトルの本を書こうかというぐらい腹立たしい条件下で何度もその表現を聞いたと主張した。ジョーンズがマクロードと共にようやくゲートに導かれ、気に触る言葉と共に村に案内されたと分かったとき、彼はたじろいだ。

もし3万人もの人々が宿を与えてくれないとしたら、小さな村などというものに何を求めれば良いのだろうか？ ジョーンズは進むのを断念し、マクロードもそれに賛同した。2人は自分たちのリボルバーをもう片方のポケットにしぶしぶ移し、その様子はイザベラ・バード・ビショップ〔英国の旅行作家〕の心をいやしただろう。それは不親切で侮辱的な朝鮮人の手によって苦しめられたことの償いに大いになり得るだろう。すぐに頭を寄せ合い、早口でささやき合い、2分後には馬も男たちも心地よい宿舎に入っていった。

その後夜になり、私は黄州に到着した。仲間を探すため大声をあげ街を眠りから覚ましながら私は馬で町中を駆け抜けた。幸運にも私には通訳者がいなかったのが疑いようもなく道にまた現れるだろう「あと10里」の文字の意味を理解せずに済んだ。よって私は馬に乗り叫び続け、街を起こし続けた拳句についてジョーンズの通訳から歓迎の声を聞いた。そして粗末な朝鮮の部屋の床で寝そべりながら食事を待っているジョーンズとマクロードを見つけた。

私たちは荷物を後方に置き去りにしたままにしていたが、ピョンヤンへと一目散に向かおうとしていた。荷物にはキャンプ用の簡易ベッドがあり、一枚の敷物が一人分割り当てられていた。そして、私たちの兵たん部将校〔後方支援部隊の将校〕は疲れ切っていた。ミルクとパンは無く、砂糖もほとんどない。お茶は少しあったが不潔な場所で、半煮えの現地の米が食事で、私たちは砂糖抜きでそれを食べた。そして後にそれでウイスキー・トデイを作るはめになった。そのせいでウイスキーは無くなった。

朝、目が覚めると、さらに少なくなった食事と、私たちの馬から2枚のブランケットが盗まれていることに気づいた。宿舎の管理人はそのことについて何も知らず、それは延々としたおしゃべりの後判明した。管理人は申し訳なく思っていた。この情報を引き出すには2度の延々としたおしゃべりが必要だった。そして3度目のおしゃべりが終わった後、私たちはこの管理人がブランケットを取り返すのになんの役にも立たないことがわかった。

私たちの馬には鞍がついていた。出発する準備ができていた。私たちはわめきながらジェスチャーで怒りを表現し、その管理人に盗まれたものを探せと命じ、追い出した。寒く、底冷えのする朝だったが、この使用人の立ち姿ほど、惨めでみすばらしい人間の姿を今まで見たことがない。彼は優柔不断で、無力で、道の真ん中に立ち、両方のゆったりとした袖に温めるために両手を入れ、肩を落とし、両目はしおれ、訴えかけるように祈り、全体的なその態度や表情は、ゆったりとした拷問による死を無抵抗に恐れながら待っているようだった。

しかし、その死への恐怖は別の男の心にも突然現れた。私たちはその地域の長^{おま}を呼び出した。その男は富裕である事を示すかのように恰幅が良く、身なりも良かった。私たちは通訳を介して彼にどうにかこうにか次のように話をした。

「2枚のブランケットが盗まれた。あなたに責任があると思っている。おしゃべりはいらぬがブランケットが必要だ。5分間で探してくれ。もしその間に戻らなかったらお前をガラクタの山の隅に追いやり、お前の部下にまた5分間で探させる。それでもまだ見つからなかったら我々と共にピョンヤンへ行って・・・」

私たちは最後まで述べなかったが、どんな恐ろしい運命がピョンヤンで彼を待ち受けているかは彼の想像に任せた。初めの5分間はなかなか実を結ばず、とうとう彼をガラクタの山へと追いやり、それから奴の部下による搜索が始まった。彼の指示のもと、ひたすら探し回った。部下達は全てを

めちゃくちゃにしてしまい、それを見物するために黄州にいる全ての人々がやってきた。私は、もしハッターが失敗したらどうやって誤魔化そうか、どうやって面目を保とうかと考え始めていたが、その時、叫び声が上がった。行動力豊かな一人の肉体労働者が10メートルも離れていない隠れ場所から無くなったブランケットを見つけだしたのだ。

しかし、朝鮮では行動力を発揮しても一円にもならない。彼の発見は他でもない彼自身への猛烈な批判のシグナルだったからだ。マクロードの通訳が最初に彼を捕まえようと試み、マゲを掴んだ。拳と蹴りの雨が降り注いだ。その間、彼は天と黄州の民に向かって抗議した。天は聞いていなかったが民衆は喜んでた。

その間私はずっと長^{おき}を問い詰めていた。無邪気にも私は彼が慌てて通訳を攻撃するのだと思っていたし、ペキン・ロードへの道のりを耐えられるものにするためには誰かが通訳を支援しなければならぬと思っていたのだ。だから私は長^{おき}の背中を隅へと押した。彼がよろけるほど、私は少し強く押した。だが、私は彼自身ではなく彼の意図を評価した。実際には、彼は自分の肉体労働者を殴る行為に加わるために勢いよく飛び出したのだった。

しかし、今のところ、なぜ彼が太陽の下で殴られたのかは私の理解の範囲を超えている。弱き者を痛めつけることで強き者の機嫌を取る、その考えはいかにもアジア人らしかった。そのことが私の頭をよぎった頃には、朝鮮人の通訳のミンヤン^{おき}が長のマゲを掴んでいた。私は歓喜した。集まった黄州の民はびっくり仰天した。長^{おき}の心境は言葉で表せる範疇を超えていた。ミンヤン^{おき}が長のマゲを掴んだ時と同様に言葉にならなかった。

「こいつに、俺たちみたいな50人以上の白人が30分後に到着すると伝えろ」私たちが馬に乗るとき、ジョーンズは言った。

「そうすれば20分後には、黄州には人っこ一人いなくなるだろうよ」マクロードは言った。

そして、彼の警告に留意しつつ、私たちは馬で走り去った。我々が怒りを抑え、3万人もの民で繁栄していたこの都市の民を根絶やしにしなくて済んだという事実は私たちの良心を癒したのだ。

付記

このレポートは、ジャック・ロンドンが1904年に日露戦争の取材をした時の従軍報告である。「ペキン・ロードを越えて鴨緑江へ」は、ロンドンのノンフィクション作品ばかりを集めた *Jack London Reports* (1970) の中の PART ONE WAR CORRESPONDENCE に収められている1篇である。巻頭に記されているように3月7日付の報告だ。原題は“Over the Pekin Road on the Way to the Yalu”である。

日露戦争が勃発すると28歳のロンドンは、1月に従軍記者として日本（横浜）に到着、神戸、長崎を経て1月30日に門司に入ったが、運悪く翌2月1日に逮捕され小倉で収監されている。この時の経緯は同書に“*How Jack London Got in and out of Jail in Japan*”として収められているが、彼はなんとかそこを脱出して、6日には汽船で朝鮮半島に向かった。ロンドンは釜山から最前線を目指して進み、薩摩藩出身の黒木大将率いる陸軍の第一軍に従軍して、中朝国境の鴨緑江まで行って日本軍の渡河作戦を目撃した。その後中国領内まで進むものの、軍の監視下で取材を邪魔されたり強制的に退却させられたりしたあげく、6月下旬に帰国した。

補足

1. 掲載した翻訳は、本邦初訳である。
2. *Jack London Reports* は、King Hendricks と Irving Shepard の編集で1970年に New York の Doubleday & Company, Inc. より出版されている。